

大阪府豊中市

利倉北遺跡

第1次発掘調査報告書

令和3年(2021年)10月

豊中市教育委員会

大阪府豊中市

利倉北遺跡

第1次発掘調査報告書

令和3年（2021年）10月

豊中市教育委員会

序 文

豊中市は、大阪府の北西部に位置し、西は兵庫県と接しています。千里丘陵にかつて広大な森林を控えたこの地は、千里川や猪名川から常に豊かな水がもたらされ、古くから人々の生活の場が育まれてきた結果、多くの歴史的遺産が受け継がれてきました。その一方、商都大阪に隣接する関係により、早くから大阪北郊のベッドタウンとしての開発が進められてきた結果、すみやかに埋蔵文化財の保護に取り組む必要がありました。近年になって開発の勢いは落ち着いてきたものの、土地利用の形態が変化してきたことを受けて小規模開発が急増し、住宅の老朽化に伴う建て替えも依然として多く、埋蔵文化財の保護について迅速な対応が求められています。

さて、今回報告いたします利倉北遺跡は従来散布地という取り扱いであり、本格的な調査がこれまで行われることはありませんでした。今回の調査では平安期の井戸や柱などの集落関連遺構を検出し、この時期の新たな集落地を発見することができました。当調査地に集落が営まれていたことが明らかになったことにより、今後の調査で集落の全容を明らかにすることが期待されます。

このたびの調査にあたりまして、事業主である株式会社アーネストワン様には調査実施に対し格別のご協力を賜りましたことを記し、厚く感謝申し上げます。また、現地調査の遂行に際しまして東海アナース株式会社及び現地担当の皆様に大変ご尽力いただきました。さらに、本書の作成にあたり、多くの皆様からご指導、ご教示を得ましたことを記し、あらためて感謝を述べたいと思います。

令和3年(2021年)10月31日

豊中市教育長 岩元義継

例　　言

1. 調査地は、豊中市利倉2丁目112-1、112-2、112-1地先に所在する。
2. 調査は、豊中市教育委員会社会教育課が、事業主体者である株式会社アーネストワンから依頼を受けて実施した。現地調査は、同課職員小堀 僚が担当した。
3. 現地調査は、令和2年7月9日から8月3日まで実施した。
4. 現地作業は事業主体者から依頼を受けた東海アース株式会社が、教育委員会の指示のもと実施した。
5. 現地調査における遺構実測等の作業を金田将徳、河田哲弥が行い、現地調査終了後の遺物実測と図面作成等については、社会教育課郷土資料室淺田尚子の指導の下、榎本純子、菅智津江、前多寿美、堂ノ本智子、河田哲弥が行った。
6. 本書の編集・執筆は小堀が担当した。
7. 本書の作成にあたっては、下記の方々からご協力を得た。(順不同・敬称略)
趙 哲濟(財)大阪市文化財協会)、高橋照彦(大阪大学)、我妻佑哉(大阪大学大学院修士課程)
7. 本書に関わる利倉北遺跡についての写真・実測図などの記録類・出土遺物は豊中市教育委員会において保管している。今後、広く活用されることを希望する。

凡　　例

1. 各挿図に掲載した方位表記のうち、M. N. は磁北、また表記のないものは国土座標系(第VI系)に基づく座標北を示す。
6. 挿図・本文中の土色表記の基準は、『新版標準土色帖 2010 年版』に基づく。
7. 插図に掲載した出土遺物の縮尺は、1:4とする。
8. 出土遺物の年代については、下記の書籍等を引用・参照した。
小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7~19世紀』京都編集工房
中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

本文目次

第1章 調査に至る経緯と方法	
1. 調査に至る経緯と経過	2
2. 調査・整理の方法	2
第2章 遺跡の位置と環境	
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	4
第3章 調査成果	
1. 基本層序	5
2. 検出した遺構と遺物	5
3. まとめ	11

挿図・表目次

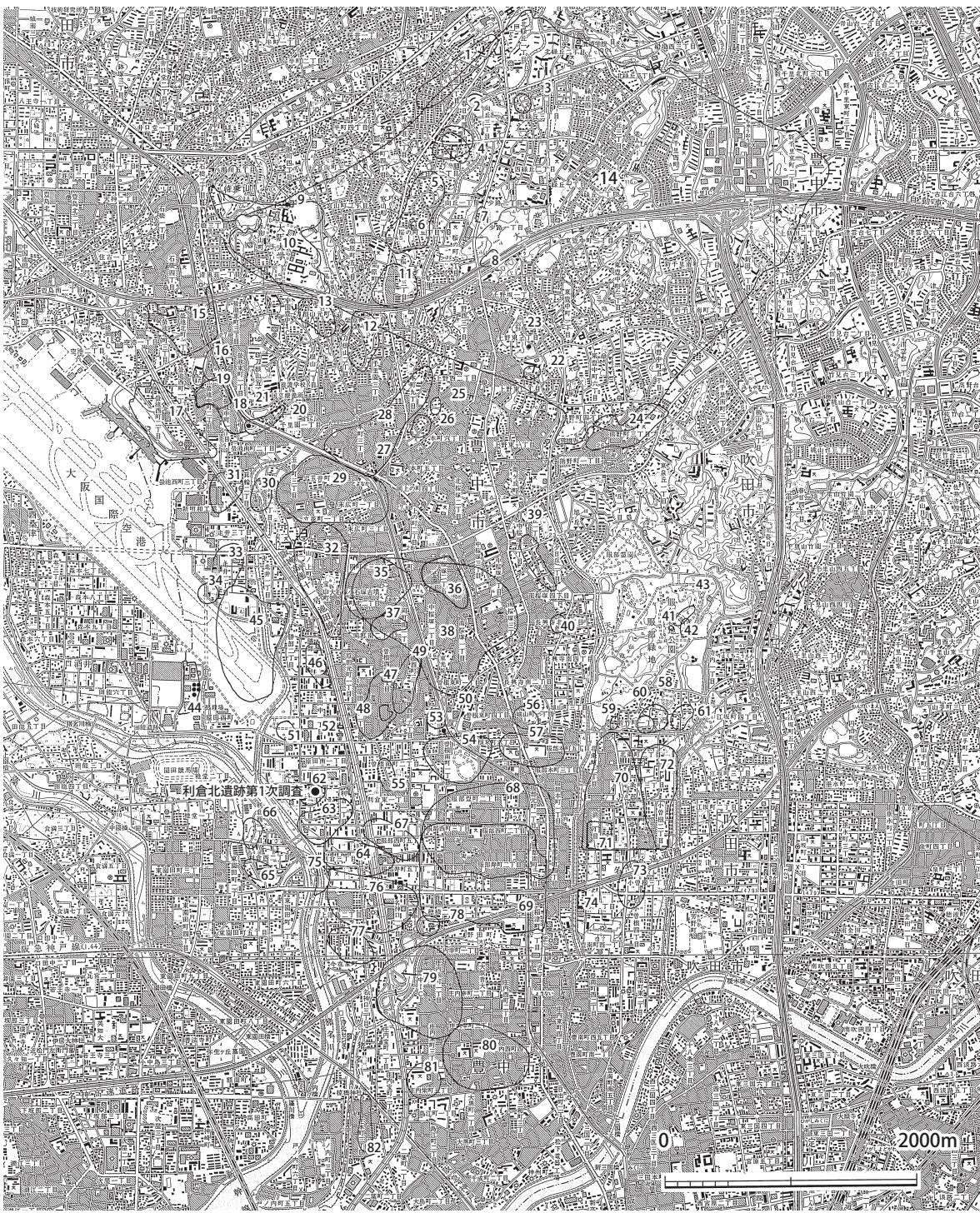
第1図 市内遺跡分布図	1
第2図 調査位置図（1：5,000）	2
第3図 調査範囲図（1：800）	3
第4図 調査区壁面図（1：40）	6
第5図 調査区平面図（1：40）	7
第6図 井戸1断面図（1：50）	8
第7図 井戸1出土遺物（1：4）	8
第8図 平安期の遺構断面図（1：80）	8
第9図 平安期の遺構出土遺物（1：4）	8
第10図 第IV層出土の平安期遺物（1：4）	9
第11図 井戸2断面図（1：50）	9
第12図 鎌倉期の遺構断面図（1：80）	9
第13図 鎌倉期の出土遺物（1：4）	9
第14図 SP13断面図（1：50）	10
第15図 第III・IV層出土の混入遺物（1：4）	10
第16図 各調査区の土層模式図（確認調査時）	11
第17図 昭和17年撮影の航空写真から推定される地形	12

写真図版目次

図版1 遺構写真

- (1) 遺構以面全景（北西から）
- (2) 井戸1最下部（北から）
- (3) 井戸2最下部（南から）
- (4) SP7（西から）
- (5) SP13（北から）

図版2 出土遺物



- | | | | | | |
|------------------------|---------------|---------------|--------------|-----------------------|--------------|
| 1. 太鼓塚古墳群 | 16. 蛭池東遺跡 | 31. 箕輪遺跡 | 46. 勝部東遺跡 | 61. 寺内遺跡 | 75. 上津島川床遺跡 |
| 2. 野畠春日町古墳群 | 17. 蛭池西遺跡 | 32. 山ノ上遺跡 | 47. 原田城跡(北城) | 62. 利倉北遺跡 | 76. 上津島遺跡 |
| 3. 野畠遺跡 | 18. 蛭池遺跡 | 33. 勝部北遺跡 | 48. 原田遺跡 | 63. 利倉遺跡 | 77. 上津島南遺跡 |
| 4. 野畠春日町遺跡 | 19. 麻田藩陣屋跡 | 34. 走井遺跡 | 49. 曾根遺跡 | 64. 利倉南遺跡 | 78. 穂積ポンプ場遺跡 |
| 5. 少路遺跡 | 20. 南刀根山遺跡 | 35. 岡町北遺跡 | 50. 曾根東遺跡 | 65. 利倉西遺跡 | 79. 島田遺跡 |
| 6. 武藏国岡部藩安部氏
桜井谷陣屋跡 | 21. 御神山古墳 | 36. 岡町遺跡 | 51. 原田中町遺跡 | 66. 椅堂の前遺跡 | 80. 庄内遺跡 |
| 7. 桜井谷石器散布地 | 22. 上野遺跡 | 37. 岡町南遺跡 | 52. 原田南遺跡 | 67. 服部西遺跡 | 81. 島江遺跡 |
| 8. 羽鷹下池南遺跡 | 23. 青池古墳 | 38. 桜塚古墳群 | 53. 曾根埴輪窯跡 | 68. 穂積遺跡 | 82. 庄本遺跡 |
| 9. 待兼山古墳 | 24. 熊野田遺跡 | 39. 下原窯跡群 | 54. 豊島北遺跡 | 69. 穂積村閔堤 | |
| 10. 待兼山遺跡 | 25. 金寺山廐寺 | 40. 長興寺遺跡 | 55. 曾根南遺跡 | 70. 小曾根遺跡 | |
| 11. 内田遺跡 | 26. 新免宮山古墳群 | 41. 梅塚古墳 | 56. 城山遺跡 | 71. 春日大社南郷目代
今西氏屋敷 | |
| 12. 柴原遺跡 | 27. 金寺山廐寺塔利柱礎 | 42. 墳輪散布地 | 57. 服部遺跡 | 72. 北条遺跡 | |
| 13. 北刀根山遺跡 | 28. 本町遺跡 | 43. 大坂城鉄砲奉行支配 | 58. 若竹町遺跡 | 73. 小曾根南遺跡 | |
| 14. 桜井谷窯跡群 | 29. 新免遺跡 | 44. 原田西遺跡 | 59. 石蓮寺廐寺 | 74. 上総国飯野藩
保科氏浜陣屋跡 | |
| 15. 蛭池北(宮の前)遺跡 | 30. 箕輪東遺跡 | 45. 勝部遺跡 | 60. 石蓮寺遺跡 | | |

第1図 市内遺跡分布図

第1章 調査に至る経緯と方法

第1節 調査に至る経緯と経過

令和元年（2019年）9月13日、豊中市利倉2丁目112-1、112-2、112-1地先において宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出された。届出地は利倉北遺跡内に立地するため、令和2年（2020年）6月9日に確認調査を実施し、坪掘りトレンチ11か所を調査した結果、地表下1.7mのところで遺構面及び包含層を確認した。

今回の予定地内の防火水槽（トレンチ7周辺）は、地表下約4.3mの建築に伴う掘削が予定されていた。よって、現行の計画では遺構面が破壊されることが判明したため、記録保存のための発掘調査が必要であることを事業主側に伝えた。これを受け、事業主側は現行の防火水槽の掘削計画については変更できないという判断を示されたため、協議の結果、建設予定地44m²を本発掘調査することとなった。調査期間については、現地調査は令和2年（2020年）7月9日から8月3日にかけて実施し、また出土品の整理作業については令和2年（2020年）8月3日から12月23日にかけて実施した。

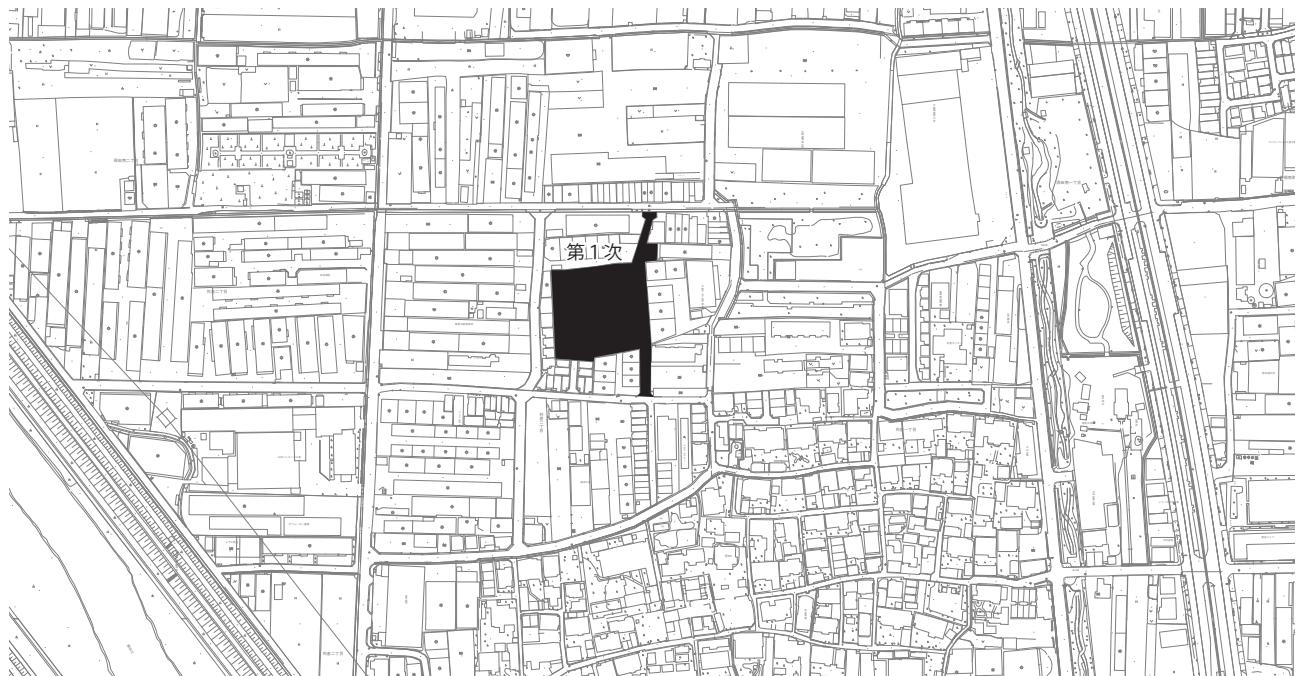
第2節 調査・整理の方法

調査は掘削深度が遺構深度も含め2mを越えるため、掘削途中に犬走を設けて法面を養生しながら実施した。

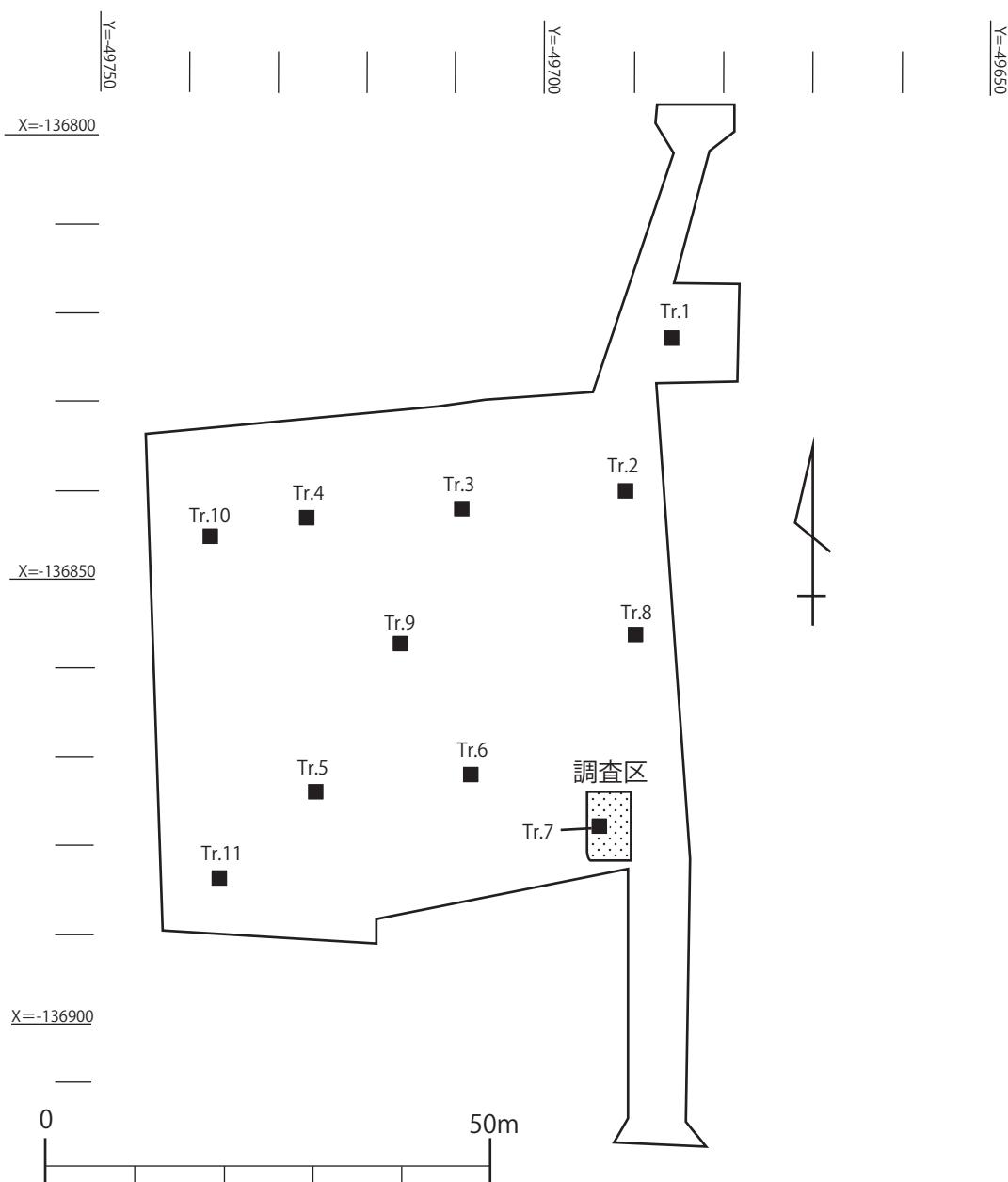
遺構名 調査後、新たに付与したものを使用している。

掘削方法 旧建物建設～解体時の盛土、その直下の旧耕作土層を重機で掘削し、それ以下を人力によって掘削を行い、遺構面・遺構の確認及び遺物の取り上げに努めた。

遺構図 遺構面に関しては1/20の平面図を作成した。また、個別遺構の平面図、断面図については必要に応じて1/10、1/20で作成し適宜撮影した。土層観察用の北壁面・東壁面断面については1/20の断



第2図 調査位置図（1：5,000）



※Tr ナンバーは 6 月 9 日の確認調査時に設定したものの。
各調査区における土層模式断面図は 11 頁第 16 図を参照。

第3図 調査範囲図 (1 : 800)

面図を作成した。

整理作業 主要遺構については現地で作成した実測図を編集し、遺構挿図を作成した。出土遺物は洗浄・接合を行った後、実測作業を実施した。現地で撮影した遺構面及び個別遺構の写真については、報告書に掲載するものを選別し掲載した。また、出土遺物については、報告書に掲載するものを選別し実測作業後に写真撮影を行った。以上の作業と併行して文章を作成し、編集作業を実施した。また、編集作業と併行して出土遺物は報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類し、収納作業を行った。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

豊中市は大阪市の北方に位置し、西は猪名川を介して兵庫県と接しており、旧国名では摂津国に属する。近世以前は大都市近郊の農村であったが、明治43年(1910年)箕面有馬電気軌道(現在の阪急電鉄宝塚線)開通を契機に宅地化が進み、現在では市域面積約37km²中に40万人もの人口を擁する北摂最大の住宅都市へと発展した。ここに至った背景としては大阪市近郊であることに加え、名神高速道路や阪神高速道路などの自動車専用道路、阪急電鉄や北大阪急行、大阪モノレールによる電車網、さらには大阪国際空港に示される交通の利便性の高さが挙げられる。

一方、地形に目を転じると、豊中市は巨視的に見て北から南に向かって標高が徐々に低くなるなだらかな地形を呈しており、市内最高地点である島熊山(海拔約100m)から最も低い大島町付近(海拔1m以下)にかけての比高差はおよそ100mである。ここで地形的特徴に基づくと、おおよそ北部・中部・南部という三地域に区分可能である。北部一帯は千里丘陵と刀根山丘陵と呼ばれる2つの丘陵地からなる。前者の千里丘陵は大阪層群の模式地としてその名が知られている通りである。続いて中部一帯は主に千里丘陵から派生する中・低位段丘を中心とした通称豊中台地に該当し、最後に南部一帯は猪名川水系、天竺川、高川の沖積作用によって形成された平野部という見方ができる。そのなかで今回報告する利倉北遺跡は猪名川の左岸の沖積地に立地する。

第2節 歴史的環境

利倉北遺跡での本格的な調査は今回が初めてとなる。従来利倉北遺跡は中世の散布地として遺跡台帳に登録されており、その詳細は不明であった。周辺では近年の開発行為に伴う確認調査において包含層や遺構がわずかに確認されている。また遺跡の南方には利倉遺跡が立地している。利倉遺跡は弥生時代から近世にいたる複合遺跡で、弥生時代の銅鐸片の出土や、古墳時代の灌漑施設、中世の環濠と推定される大溝等の遺構が検出されている。近隣に範囲を広げると同じく銅鐸片及び小型仿製鏡が出土している利倉南遺跡や、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての集落跡で大量の須恵器、玉類、製塩土器が出土した利倉西遺跡などが存在する。これらは沖積地内の微高地につくられた集落遺構と考えられるが、今回報告する利倉北遺跡も周辺の条里地形がわずかに乱れており、微高地の存在が予想される。いずれにせよ利倉北遺跡ではこれまで本発掘調査を実施した例はなく、当遺跡の具体的な内容の解明が期待された。

第3章 調査成果

第1節 基本層序

今回の調査地における基本層序は以下の5層に大別される。

第I層 現地表面の地表下約1.5mまでは近現代の整地土及び盛土である。

第II層 旧耕作土層及び床土層である。おおよそ近代頃と考えられる。

第III層 中近世の耕作土層である。主に黄褐色系の細粒砂で構成されている。

第IV層 今回の調査遺構面のベース土層にあたる古土壤層である。第III層との境界には第4図18層のマンガン斑が沈着している。第IV層は全体に黒褐色を呈しており、約50cm程の層厚がある。第IV層内では弥生土器片や須恵器片が混入しており、古土壤は主に弥生～古代にかけて形成されたものと考えられる。今回の調査で検出された遺構は平安時代から中世と第IV層形成時期よりも新しいため、検出遺構はこの古土壤をベース層として形成されたと思われる。なお、6月9日に実施した確認調査では11か所の試掘坑を設けたが、敷地の全面に渡ってこの古土壤層（第IV層）が検出された。今回は防火水槽により破壊されるトレチ7周辺の44m²が調査対象のため敷地全体の様相は調査できなかったが、調査地の敷地全域に遺構が広がっていることが予想される。

第V層 調査地における基盤層である。灰色～橙色粗粒砂であり、第IV層との間にはやや基盤層がやや土壤化した層がかんでいる。

第2節 検出した遺構と遺物

今回の調査は重機で第II層まで掘削し、人力掘削において以下を掘削した。調査遺構面は第IV層上面となる。第IV層の最上部には第4図18層のマンガン斑層が全体的に薄く沈着しており、第IV層直上での遺構検出は不可能であったため、任意で一段掘り下げた面を調査面としている。この調査面からは弥生土器から古代の土器を含む土壤化層をベース土とした平安時代及び鎌倉時代の大きく2時期の遺構が検出された。以下時期別に報告する。

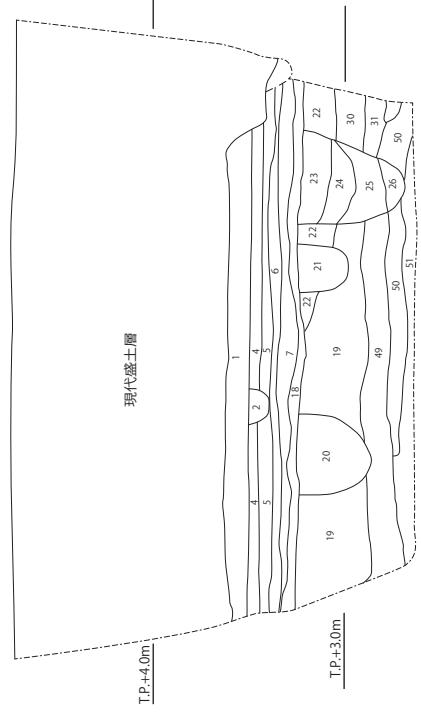
平安時代

主に10世紀代の検出した遺構は井戸1基、土坑1基、溝1条、ピット多数がある。

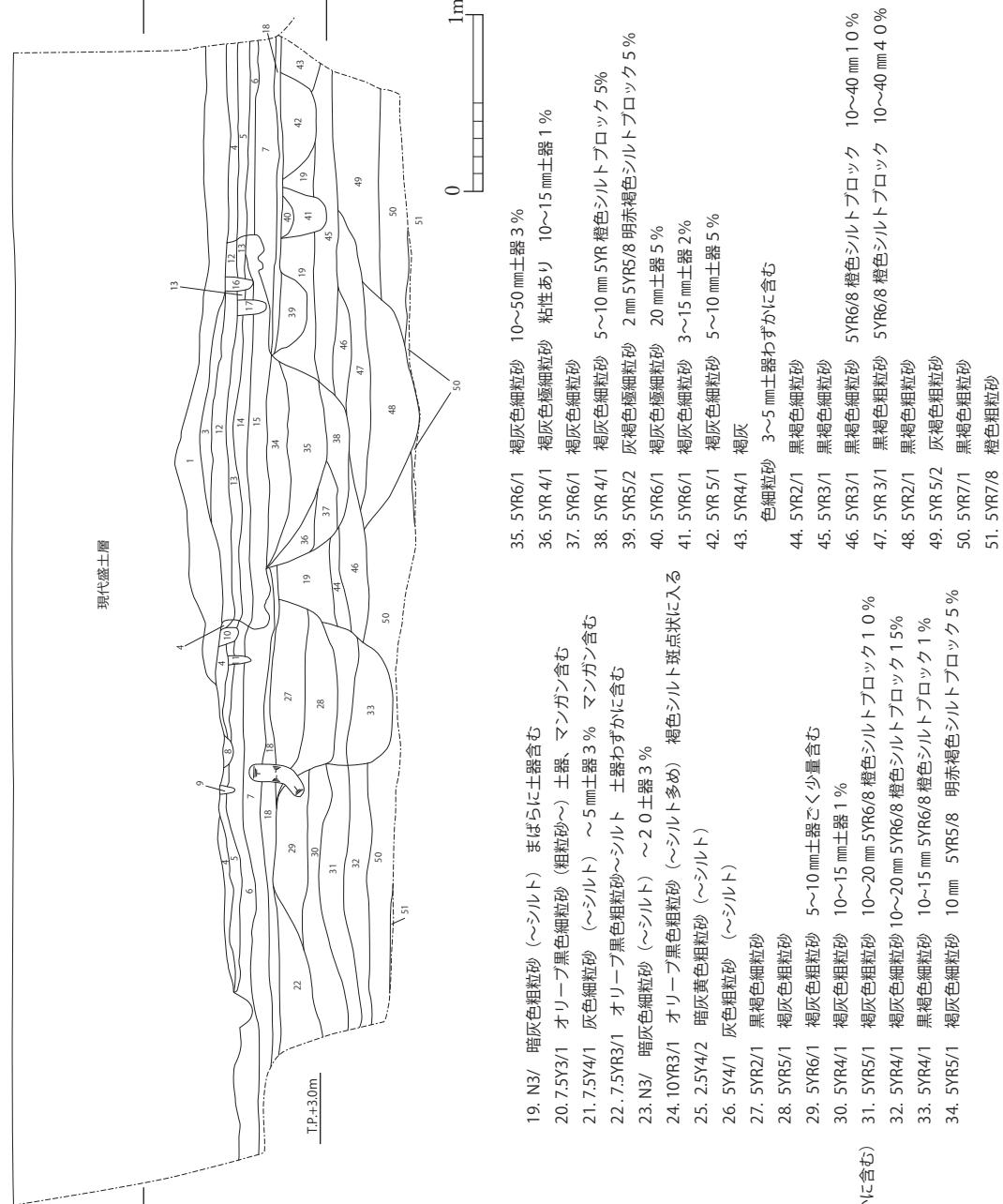
井戸1（第6図）は調査区の南側で検出した井戸である。上層は廃絶時の埋没土が堆積しているが、下層では直径約100cm、高さ約25cmの曲物が4段以上にわたり残存していた。曲物はそれぞれ直径がほぼ同じものを重ねている。井戸1からは第7図の遺物が出土した。1は土師器の皿Aである。復元口径14.7cm、器高2.4cmをはかり、全体的にナデで仕上げている。2は井戸1の最下層（曲物中）から出土した土師器碗である。復元口径13.6cm、残存高4.0cmであり、口縁端部内側に薄い沈線が入る。3も土師器碗であり復元口径13.2cm、残存高2.8cmであり、口縁端部は外側に緩く外反している。4は緑釉陶器の底部である。底部径6.8cm、残存高2.8cmをはかり、高台は削り出しで成形している。胴部は欠損部付近でやや内側に屈曲しており、底部には釉が施されていない。内側は釉がやや薄れており、使用痕と思われる。これらの特徴から、洛西窯などの平安京近郊産で、10世紀前半に位置づけられる。5は黒色土器A類の把手环の碗状製品である。口径13.4cm、器高6.7cmをはかり、把手以外は完形で出土した。内面はミガキを密に施しており、外面上部もミガキがみられ、通常の黒色土器A類碗よりも全体的に厚く仕上げている。外面は不定方向のケズリ痕が明瞭に残る。把手部から反時計方向に約45°の位置には

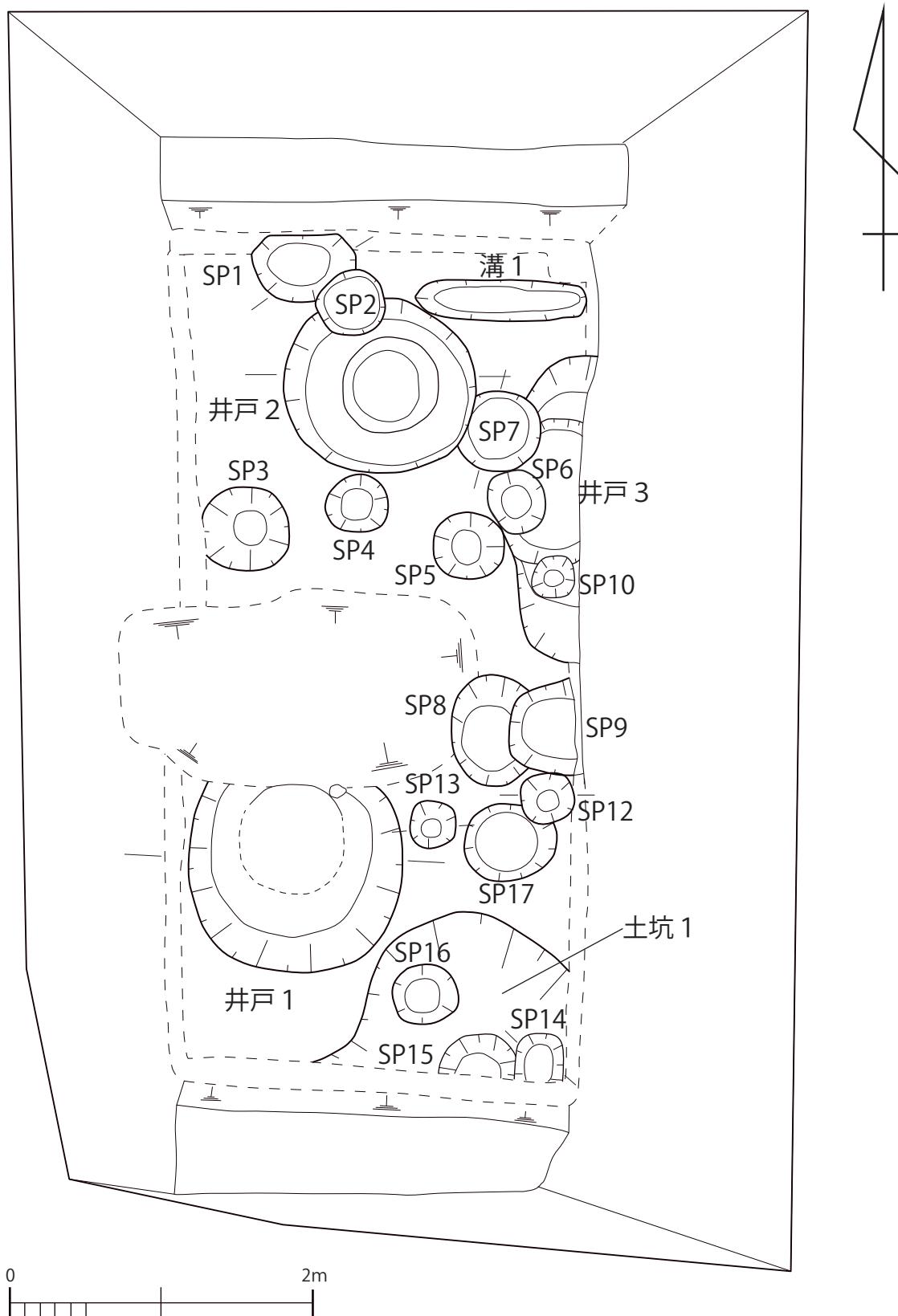
第4図 調査区壁面図（1：40）

調査区北壁

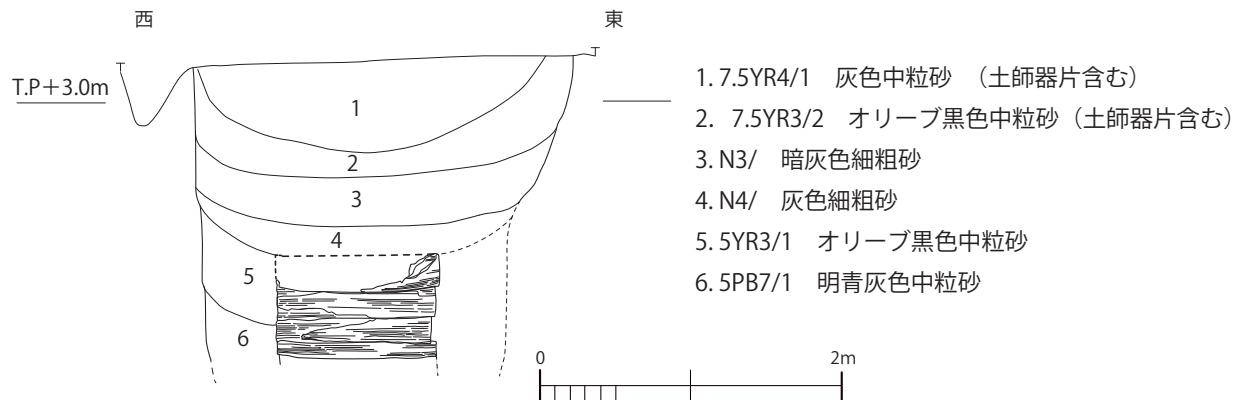


調査区東壁





第5図 調査区平面図（1：40）

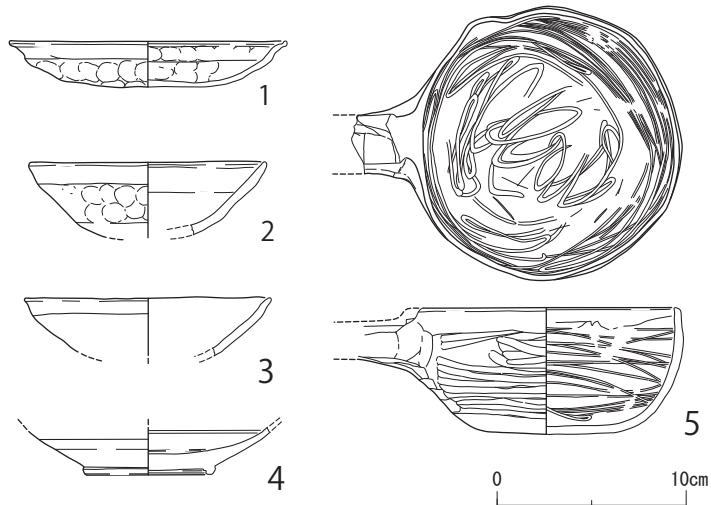


第6図 井戸1断面図 (1:50)

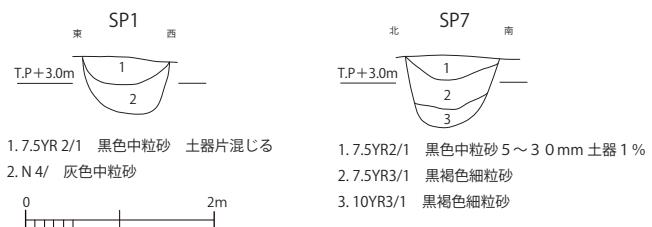
口縁部に注口が1つ存在する。類似の製品として薬師寺西僧房出土の把手付甕などがあげられる^{註1}。しかし5は椀状の形態をしており、注口が把手から垂直の位置ではなく斜め45度の場所にあるなど、かなりの独自性がみとめられる。共伴遺物と特徴的に10世紀代の所産と考えられる。これらの出土遺物から井戸1は10世紀前半頃に埋没したものと考えられる。

SP 1（第8図左）は調査区の北端で検出したピットである。深さは60cmほどで、第9図1・2の遺物が出土した。1・2ともに黒色土器A類の椀で、1は復元口径15.7cm、残存高4.2cmをはかる。内面にはミガキが密に施されているが、摩滅している。2は復元口径15.5cm、残存高2.9cmをはかり、内面は密にミガキが施されている。これらの遺物からSP1は10世紀代と考えられる。

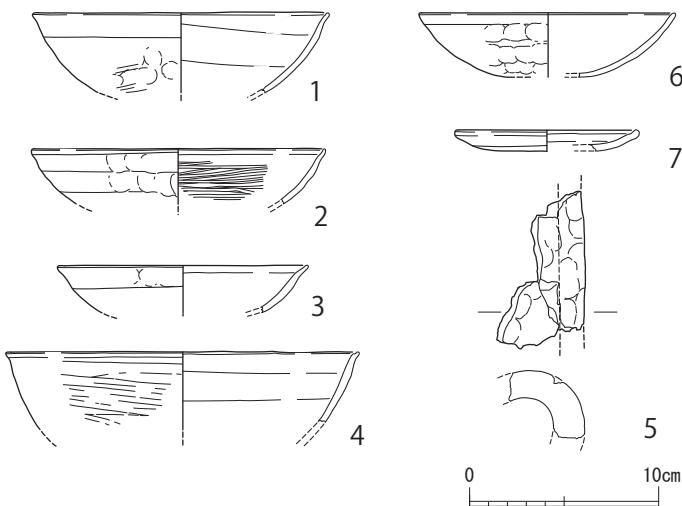
SP 7（第8図右）は調査区南側で検出したピットで、第9図3～5の遺物が出土した。3は黒色土器A類の椀で復元口径18.6cm、残存高4.2cmをはかり、口縁端部の先端で外反している。内外面ともにミガキを施しているが、内面は摩滅している。4は土師器の椀で、復元口径13.2cm、残存高2.5cmをはかる。全体的にナデにより仕上げており、口縁部付近は緩く外反しながら細くなる。5



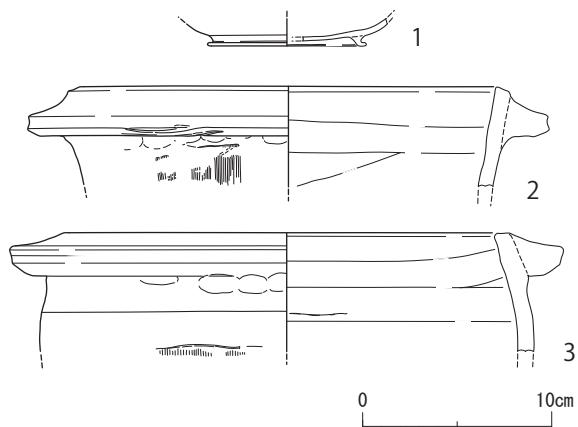
第7図 井戸1出土遺物 (1:4)



第8図 平安期の遺構断面図 (1:80)



第9図 平安期の遺構出土遺物 (1:4)



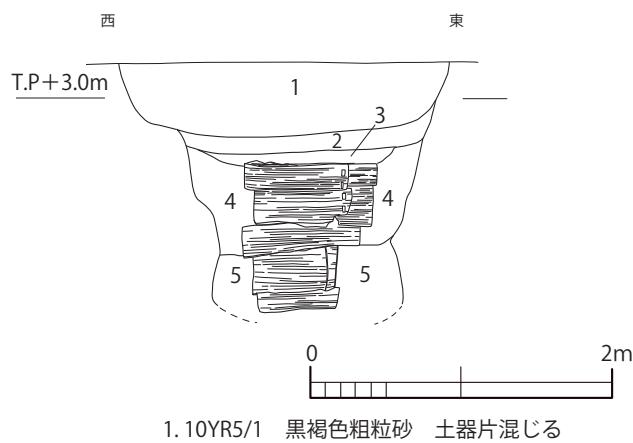
第10図 第IV層出土の平安期遺物（1：4）

の椀底部で、復元底部径 8.4cm、残存高 1.8cm をはかる。高台は貼付高台で、端部は外側に外反している。2・3は土師質の羽釜で、羽部が口縁付近につくことから摂津型である。2は復元口径 23.3cm、残存高 5.2cm をはかり、胴部の外面には縦方向にハケ目がみられる。3は復元口径 23.4cm、残存高 6.3cm をはかり、胴部に2と同様縦方向のハケ目が認められる。これら第10図の遺物は第IV層中の未検出遺構埋土に伴うものと考えられ、いずれも10世紀代と考えられる。

鎌倉時代

13世紀代の遺構は井戸1基とピットがあげられる。

井戸2（第11図）は調査区の北側で検出した井戸である。井戸1同様、上層は埋没時の堆積土だが、下層では曲物が良好に残存していた。曲物は少なくとも5段以上重なっており、上部の曲物の直径は90cmであるのに対し、最下部の曲物は直径55cmと下部に向かうにつれて直径が小さくなっている。また、重なり方も真っすぐではなく、やや交互にずれて重なっている。井戸2からは第13図の1・2が出土した。1は土師皿で復元口径 8.6cm、器高 1.2cm をはかる。全体的にナデによって仕上げており、外面には粘土板結合法による成形痕が確認できる。2は輸入白磁碗の底部である。底径 7.0cm、残存高 2.7cm をはかり、高台は削り出しで成形している。外面および断面は灰白色を呈し、回転ケズリにより成形され、残

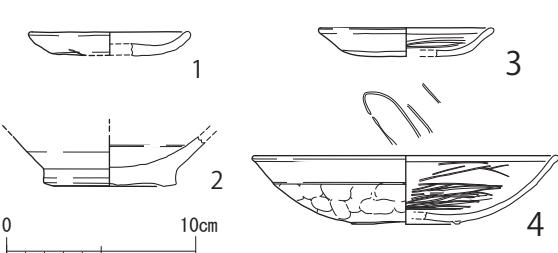


第11図 井戸2断面図（1：50）

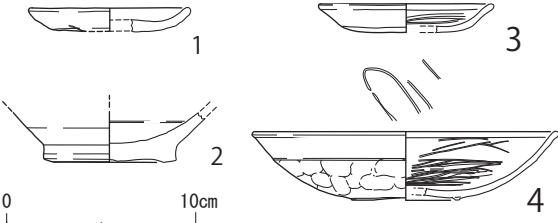
は輪の羽口である。径は約6cmであり、丸みを帯びているが、ナデによりやや角ばった作りになっている。内面および断面に熱を受けた痕跡がみられる。SP7はこれらの遺物から10世紀代と考えられる。

このほか溝1、土坑1、SP8、SP9、SP17も出土遺物から平安期と考えられる。第9図6はSP9から出土した土師器碗で復元口径 13.5cm、残存高 3.4cm をはかる。7はSP17から出土した土師器の皿Aで、復元口径 9.8cm、器高 1.1cm をはかる。7は11世紀代のものと思われる。第10図は遺構ベース土となる第IV層中から出土した遺物である。1は黒色土器A類

第12図 鎌倉期の遺構断面図（1：80）



第13図 鎌倉期の出土遺物（1：4）



存部位においては内面のみに施釉されている。井戸2では図示できなかったが、このほかに和泉型瓦器碗片も出土しており、おおむね13世紀代に機能したと考えられる。

SP12（第12図左）は調査区の中央部東側で検出したピットである。深さは約80cmあり、図化していないが瓦器片が出土していることから、おおよそ13世紀代と考えられる。

SP14（第12図右）は調査区の南端で検出したピットである。深さは約60cmあり、第13図3の瓦器皿が出土した。復元口径は9.6cm、器高1.6cmをはかり、ナデ成形後に内面にミガキを施している。遺物からSP14は13世紀代に機能したものと考えられる。

第13図4は遺構面の上層となる第III層の耕作土層中から出土した和泉型の瓦器碗である。復元口径16.1cm、器高3.6cmをはかり、内面と見込みにミガキがみられる。高台は貼り付けて成形しており、やや粗雑なつくりをしている。年代は13世紀代に位置づけられ、後世のかく乱により上層である第III層に混入したものと考えられる。

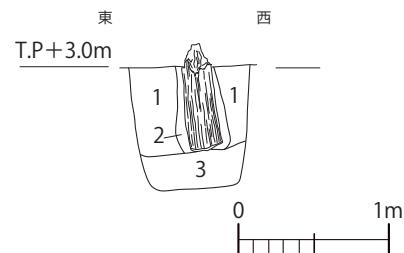
時期不明の遺構

SP13（第14図）は調査区南側で検出した柱穴である。柱穴は直径約40mほどで、中央からは木柱が幅約10cm、残存高35cmで残っていた。**SP16**も同様に同規模の木柱が残存していた柱穴である。SP13、SP16ともに何らかの建物を構成していた柱穴と考えられるが、遺物が出土しなかったため時期を特定するには至らなかった。しかし、残存していた木柱径や保存状態が同様であることを考慮すると2つともに同時期に機能していた可能性がある。今回検出した遺構は主に10世紀代と13世紀代に大別できるため、おそらくどちらかの時期に属するであろう。

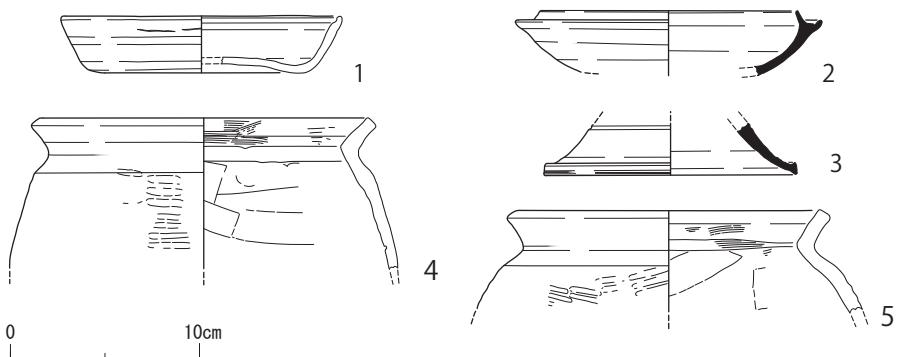
第III・IV層出土の遺物

第1節の基本層序でも述べたように遺構面ベース土となる第IV層は約50cm程の層厚がある古土壤層である。第IV層は平安期・鎌倉期以前の遺物が包含されており、土壤化形成の過程を示す遺物と位置づけられる。耕作土層の第III層にも第IV層より巻き上げられ混入した遺物が出土しており、第III層・IV層出土遺物を第15図に示した。1は土師器の壺Aであり、第III層から出土した。復元口径14.8cm、器高3.0cmをはかり、摩滅で暗文等は確認できない。おおよそ8世紀後半の奈良時代のものと思われる。2は須恵器の壺Hの身でSP1（第8図左）内から出土したが、第IV層中にあったものが混入したものと考えられる。復元口径13.6cm、残存高

3.4cmをはかり、6世紀後半に位置づけられる。3は須恵器の高壺脚部で、第IV層から出土した。底部径13.4cm、残存高2.4cmをはかり、残存部位において透孔は確認できない。脚端部は折り返しの断面三角形状を呈しており、ややラッパ



1. 2.5Y 5/2 暗灰黄色中粒砂～細粒砂
2. N 5/ 灰色中粒砂
3. 3Y 4/1 灰色粗粒砂
第14図 SP13断面図 (1:50)



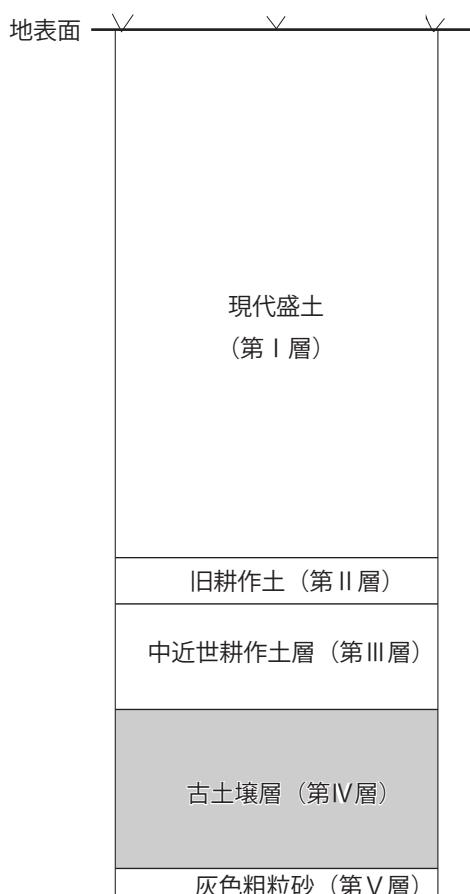
第15図 第III・IV層出土の混入遺物 (1:4)

型にひらくことから桜井谷窯跡群または吹田窯跡群と想定される。時期は6世紀後半頃と思われる。4は古式土師器の甕で、当調査区内に事前に実施した確認調査の際、トレンチ7内の第IV層で出土した。復元口径16.0cm、残存高8.2cmをはかり、外面にはやや斜め方向のタタキ痕と内面にケズリ痕が確認できる。これらの特徴から4は庄内期に位置づけられる。5も古式土師器の甕であり第IV層から出土した。復元口径16.0cm、残存高5.4cmをはかり、外面には斜め方向のタタキ痕、内面には摩滅により観察しづらいがケズリ痕がみられるため庄内期の所産と考えられる。

このほか限られた面積ではあるが、6月9日に実施した確認調査で敷地全体に11箇所の坪掘りトレンチを設定したが、全面にわたり弥生後期～平安期の遺物が出土した。いずれも第IV層の古土壤層が確認されており、遺物も大半は第IV層中から出土した。このことから、本調査を行った当調査区以外の敷地全面にわたり弥生後期～平安期に土壤化された第IV層が堆積しており、今回のように平安期や鎌倉期、またそれ以前の遺構面も広がっているものと想定される。

第3節 まとめ

今回の防火水槽予定地の本発掘調査では弥生時代～古代に形成された古土壤層（第IV層）をベース土とした10世紀代（一部11世紀含む）と13世紀代の遺構が確認された。今回の本発掘調査では曲物の井戸が10世紀代・13世紀代とそれぞれ検出しており、木柱が残存するピットも検出した。また44m²という狭い面積にも関わらず遺構密度が高かったことから、当遺跡内では10世紀および13世紀に集落地として機能していたことは間違いない。また10世紀代のSP7より轍の羽口が出土したことから、何らかの鋳造を行っていた可能性がある。鉄滓等の鋳造関連遺物や遺構は今回確認されなかったため、今回は間接的な証拠にとどまる。



本発掘調査前に実施した確認調査では坪掘りトレンチ11か所を掘削したところ、全トレンチにおいて層厚約50cmの古土壤層（第IV層）の堆積を確認した（第16図）。今回の本発掘調査によって、第IV層からは弥生時代後期から古代にかけての遺物が出土し、確認調査でも弥生～古代の土器片が出土していることから、調査地全域に堆積する古土壤層はおそらく弥生時代後期から古代にかけて形成されたものと考えられる。

昭和17年（1942年）に撮影された航空写真では宅地化される以前の周辺状況が観察できる（第17図）。利倉地域では旧集落地をのぞき碁盤の目状の条里地割が明瞭に残っていることがわかる。調査地の南方では近世からつづく利倉村の旧集落が存在している。この利倉村集落の形状は周囲の条里地割に合致しない形状をしており、微高地に位置している。当調査地周辺も利倉村集落ほどの大きさはないものの、条里地割がやや乱れている地形が確認できる。現況の地表面も周囲の耕作地より約1.5mほど標高が高くなっている、当調査地周辺の地形も周辺よりやや地形的に高い微高地であると考えられる。一方利倉村旧集落の微高地と当調査地周辺の微高地の間では標高がやや低く、第17図からは条里地割の乱れが帶状に伸びていることが読み取

第16図 各調査区の土層模式図
(確認調査時)

れる。この帯状の低地は猪名川から派生していた旧河道と考えられる。これらの条件から利倉村旧集落の微高地、当調査地の微高地はこの旧河道によって形成された自然堤防と捉えることができるだろう。当調査地の微高地の形成時期は第IV層の遺物の出土量から弥生後期～古墳時代頃と推定される。今回の調査成果から土壤化の進んだ微高地に10世紀および13世紀に集落が営まれたことは確実である。その他の時期については本発掘調査の面積が狭かったため今回の調査では明らかにすることはできなかった。しかし、確認調査時のトレーニング調査ではいずれのトレーニングも中世後期以降の遺物は少なく、この微高地内における集落化は中世後期段階で衰退し、その後耕地化したと考えられる。一方、南方の利倉村旧集落周辺は弥生時代から近世にわたる複合遺跡である利倉遺跡内に立地する。利倉遺跡の第1次調査では15世紀の環濠と考えられる大溝を検出している。また、利倉遺跡第3次調査では12世紀から近世にかけての遺構が検出されている。これら利倉遺跡の調査成果を踏まえると、もともと利倉遺跡、利倉北遺跡の双方の微高地に存在した集落が中世後期以降、利倉遺跡側に集約されたものと考えられる。その後第III層の耕作土層が堆積していることから耕地化し、戦後まで宅地化されることがなかったと想定される。

今回の調査は利倉北遺跡内における初の調査であり本発掘調査区の面積が44m²と狭かったにも関わらず、多くの情報を得ることができた。本発掘調査区では密度の高い集落遺構を検出し、確認調査の成果と併せると広大な当調査地（届出地）内の全面にわたり古土壤層が広がり、遺構の広がりも想定されるに至ったことは、重要な調査成果と言える。また、豊中市内において10世紀代の遺構が確認されている遺跡は曾根遺跡や螢池北遺跡など決して多くはない。そのような中、新たな平安期の集落が確認されたことは市域の集落変遷を考える上でも重要な発見であったと言える。しかし、今回の調査は遺跡の一端を確認したにすぎないため、利倉北遺跡内での今後の調査成果に期待したい。



第17図 昭和17年撮影の航空写真から推定される地形
※大阪市所蔵航空写真（昭和17年）を一部改変

註1 奈良国立文化財研究所 1987「第V章 遺物」『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報 第45冊

図版 1



(1) 遺構面全景 (北西から)



(2) 井戸 1 最下部 (北から)



(3) 井戸 2 最下部 (南から)

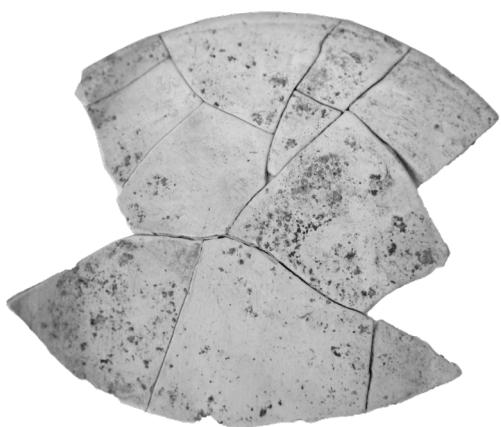


(4) SP7 (西から)



(5) SP13 (北から)

図版2 出土遺物



第7図1



第7図5



第7図3



第9図5



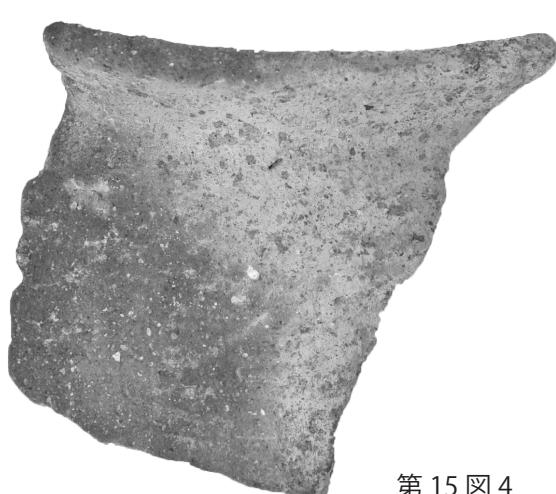
第9図1



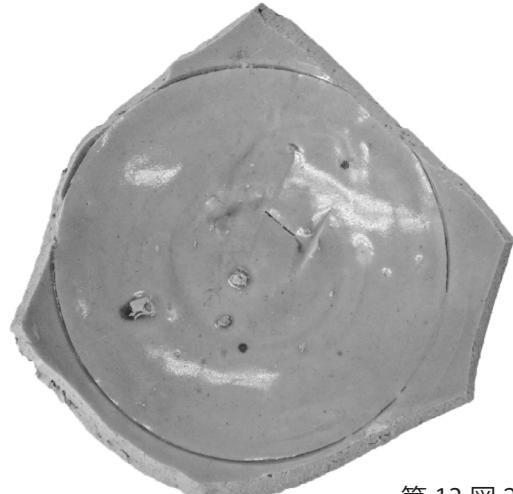
第10図1



第13図4



第15図4



第13図2

報告書抄録

ふりがな	とくらきたいせき だい1 じはっくつちょうさほうこくしょ					
書名	利倉北遺跡 第1次発掘調査報告書					
シリーズ名	豊中市文化財調査報告					
シリーズ番号	第84集					
編著者	小堀僚					
編集機関	豊中市教育委員会(市町村コード27208)					
所在地	〒561-8501 大阪府豊中市中桜塚3丁目1-1 TEL06-6858-2581					
発行年月日	令和3年(2021年)10月〇日					
所取遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
利倉北遺跡 第1次	利倉2丁目112-1、112-2、112-1地先	34°45'42"	135°27'35"	20200709～ 20200803	44.0 m ²	宅地造成

所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
利倉北遺跡 第1次	集落跡・散布地	弥生・平安～中世	井戸・柱穴	黒色土器・土師器・白磁・瓦器・轍の羽口	平安時代・中世の集落関連遺構を検出

豊中市文化財調査報告 第84集
利倉北遺跡 第1次発掘調査報告書
発行：豊中市教育委員会
豊中市中桜塚3丁目1-1
令和3年(2021年)10月〇日
印刷：やまかつ株式会社

